

劇評

ラビア・ムルエ連続上演『雲に乗って』
作・演出：ラビア・ムルエ [レバノン]

『雲に乗って』は、情感に訴える感動的な作品であるとともに、知的な感性に満たされた完成度の高い演劇である。その物語は、極々個人的なものでありながら、非常に普遍的なものを描くことに成功している。

Jim Quilty, The Daily Star (レバノン)

ムルエは、中年の美しい悲しげな声を持つ彼の弟イエッサを舞台に上げた。彼は舞台上で演じ、詩を読み、そして映像を見せる。ありのままの、個人的なドキュメンタリー演劇である。そして、そこで語られることは、個人的でありながら、普遍性を喚起する点が印象深い。

Herien Wensink, <http://www.theaterkrant.nl/> (オランダ)

古い型のカセットテープの山や、テーブルの上のテープレコーダーは、ベケットの『クラップの最後のテープ』にある悲しげなキャラクター、クラップを想起させる。『雲に乗って』の上映でイエッサ・ムルエが失った記憶を取り戻そうとする姿は、クラップが録音した日記を聞きながら彼のささやかな人生を取り戻そうとする姿に重なる。

Robbert van Heuven, <http://www.theaterkrant.nl/> (オランダ)